

大豆作におけるハスモンヨトウの発生生態と効率的防除			
【要約】 ハスモンヨトウの常発地域において、加温施設での越冬個体はほとんど観察されず、主要な発生源である可能性は低い。薬剤による防除適期は、白変葉が増加する8月上旬中旬とフェロモントラップによる捕殺虫数が急増する8月下旬～9月中旬である。			
農業技術振興センター・環境研究部、病虫害防除所		【実施期間】 平成17年度～平成20年度	
【部会】 農産	【分野】 高品質化技術	【予算区分】 県単	【成果分類】 指導

【背景・ねらい】

本県の大豆作では、ハスモンヨトウによる被害が問題になっている。ハスモンヨトウの発生は被害の発生しやすい地域、いわゆる常発地があるとされているが、その原因となる発生源やハスモンヨトウの詳細な増殖過程については不明な点が多い。このため、適切な防除対策がとられず、被害が発生することがある。

そこで、ハスモンヨトウの常発地域における発生生態などを解明するとともに、大豆作での効率的な防除対策の検討が必要である。

【成果の内容・特徴】

- ①ハスモンヨトウの常発地において、加温施設内で越冬個体が認められなくても4月下旬には野外でフェロモントラップに誘殺される(図1)。県内の他地域において、加温施設内で越冬個体を確認しており、施設内での越冬は可能であるが、夏季の発生源となる可能性は低いと考えられる。
- ②ダイズ作付け前にはサトイモなどでハスモンヨトウの幼虫を確認しており、これらの寄主植物で増加した個体、および他地域からの飛来個体によって、作付け後のダイズほ場における個体数は増加する。
- ③ダイズほ場に近しい水稲作付田などでは誘殺個体数は少なく、ダイズほ場で発生したハスモンヨトウはダイズほ場にとどまっている可能性が高い(図2)。
- ④ハスモンヨトウの被害が多い地域では、白変葉が増加する時期(8月上旬～中旬)とフェロモントラップによる捕殺虫数が急増する時期(8月下旬～9月中旬)が薬剤による防除適期である(図3)。

【成果の活用面・留意点】

- ①ハスモンヨトウの常発地域での効率的な防除対策の計画策定に活用できる。
- ②ハスモンヨトウの発生量は年次間差があるので注意する。

[具体的データ]

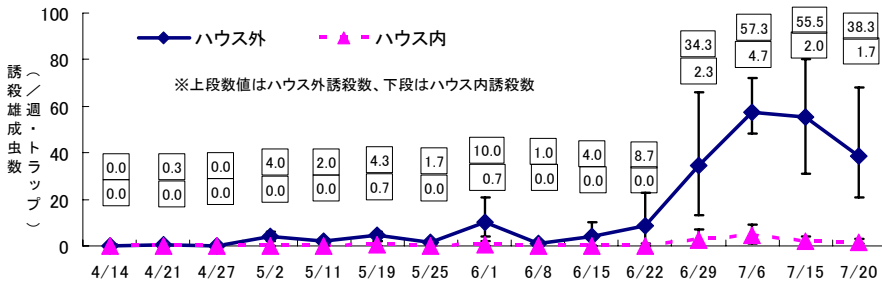


図1 ハウス内外におけるハスモンヨトウ雄成虫の発生消長(平成17年度調査)

注) 値はハウス内外各3トラップの平均値、バーは3トラップの最高最低値の区間を示す。

低値の区間を示す。

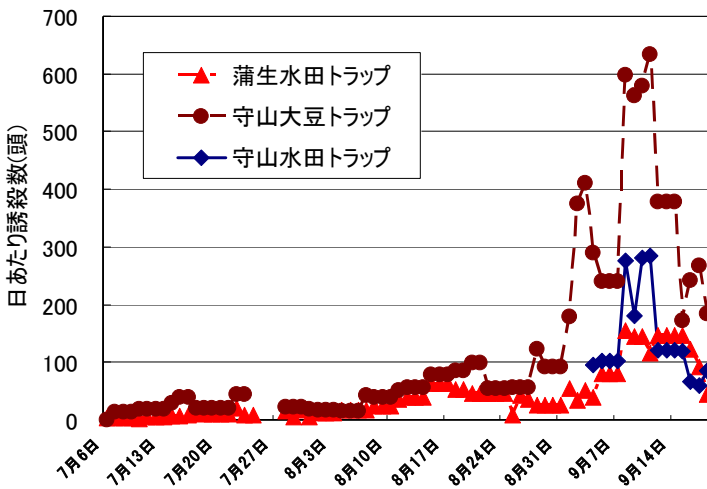
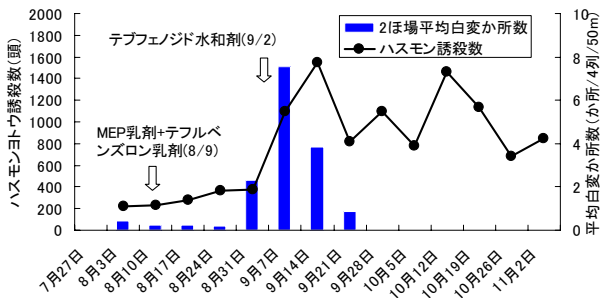


図2 ダイズほ場と水稻作付田におけるフェロモントラップ誘殺数の推移(平成20年度調査)

平成17年度調査



平成19年度調査

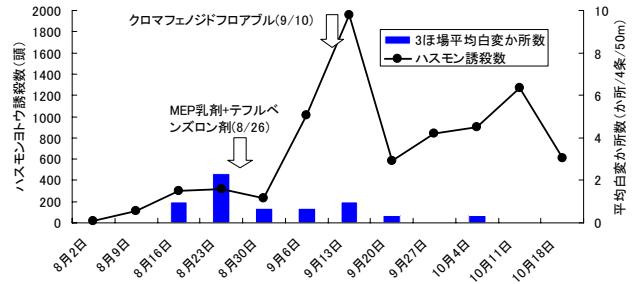


図3 ダイズほ場におけるフェロモントラップ誘殺数と白変葉数の推移

ハスモンヨトウ誘殺数と白変葉数の推移

[その他]

- 研究課題名
 - 大課題名：琵琶湖の水質・生態系保全に配慮した特色ある農林水産技術の開発
 - 中課題名：環境こだわり農業推進のための技術開発
 - 小課題名：農薬安全使用技術・減農薬栽培技術の確立
- 研究担当者名：
 - 重久眞至、保積直史 (H17～H19)、川村容子 (H17～H18)、近藤篤 (H19～H20)、江波義成 (H17～H20)
- その他特記事項：平成17年度技術的試験研究要請課題(南部、東近江地域振興局)